

# 企業訪問 資源循環レポート

(株) 中西

## パートナー社員が輝く 資源再生への大きな力

株式会社 中西

株式会社 中西



株式会社 中西

■代表者／代表取締役 笠原 尚志

■所在地／愛知県豊明市栄町高根103番地

TEL 0562-97-6925 FAX 0562-97-6379

昭和39年空ビン商として「中西商店」を創業。平成6年「有限会社中西商店」を設立、翌年、廃棄物再生事業者として愛知県に登録。平成14年愛知県・名古屋市産業廃棄物収集運搬業新規許可を取得し、平成15年「株式会社中西」に組織変更、以降、施設・業務の拡充を図り（豊明市に新左山工場新設、津島市鹿伏兎リサイクルセンター内で資源中間処理、同センターを拠点に資源回収開始、愛知県産業廃棄物処分業新規許可取得。）、平成21年障害者雇用優良企業認証制度「ハートフル・リボン・マーク」の認証を取得、豊田市・岡崎市産業廃棄物収集運搬業新規許可取得、平成27年精神障害者等雇用優良企業の認証を取得。

令和3年障害者雇用に関する優良な中小企業主に対する認定制度「もにす認定制度」の認定を受ける。

一般廃棄物収集運搬業は、平成22年より近隣6地域の市町の許可を順次取得。

今号では、同社代表取締役 笠原尚志氏、専務取締役 中西隆氏に、徹底した分別による資源再生への取り組み、積極的な障がい者雇用の推進等についてお話しを伺いました。

※同社では、「障害者」という表記ではなく「障がい者」と表記をしています。以降、「障がい者」と記載。）



令和2年度「障害者雇用優良事業所等の厚生労働大臣表彰」の表彰状を持つ笠原社長

### ■徹底した分別

ガラスびんは重くて割れるという弱点はあるが、天然素材であることから環境に優しく、保存容器として中身の味が変わりにくい、リユース性に優れ、また無駄のないリサイクルも可能なものです。

同社においては、障がい者の方を“パートナー社員”と親しみを込めて呼び、リターナブルびん（洗浄後そのまま再使用）の抽出・検品工程は、パートナー社員の方たちの特性を活かし難しい検品（びんの中

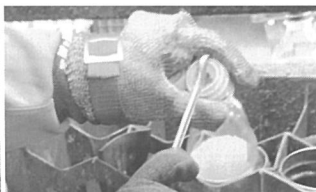
の異物確認、口元の割れ、キズや亀裂、汚れの付着等)も行っています。その他はワンウェイびん(カレット)と呼ばれ、異物を除去し色選別(白、茶、緑、その他)をします。ベルトコンベヤで流れてくるびんを選別するには素早く正確な手さばきが求められ、異物の除去(陶磁器・乾電池・キャップ・鉛など、びんの中の異物確認、耐熱ガラス・クリスタルガラスかの判別)は熟練を要する作業です。

プラスチック製容器包装はストックヤードから破袋機に投入し、軽いものは除袋機で掃き飛ばし、次に手選別で異物や不適合品を取り除きますが、選別時の重いものに異物が多いとのことでした。「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」が施行され、ここ豊明市では令和4年10月から容リプラ回収に製品系プラを含めた一括回収が実施されます。それに合わせて、もう一台除袋機を導入し、選別ラインを工夫することで、さらに細かく効率的に分別できるようにしていくとのことでした。シャンプーなどのディスペンサーボトル(詰め替え用)は、容器包装リサイクル法(以降、容リ法と記載)の対象が製品系プラスチックなのかに分けられますが、見た目ではシャンプーが入って売られているのか、製品としてのディスペンサーボトルなのか分かりません。そのため、プラマークがついているかで見分けるしかありません。容リ法の対象となる目安は、①中身が商品か ②中身と分離した際に不要となるか ③社会通念上、容器包装と考えられるか、であり、有料のレジ袋も容リ法では再商品化義務の対象です。

アルミ缶やスチール缶は、搬入物の異物を取り除いてからベルトコンベヤで流し、途中にある磁石でスチール缶を取り除き、アルミ缶だけをプレスします。アルミ缶は、アルミ缶、自動車部品、鍋に、スチール缶は、スチール缶、鉄骨、鉄条網に再生されます。



ベルトコンベヤ上のびんを素早く選別して作業場前のびん集積場に投げ入れるパートナー社員さん



びん上部のキャップをレンチで、数秒で外すことが得意なパートナー社員さん



集荷された廃棄物は重機で破袋機へ投入される



手選別で異物を取り除きリサイクルへ

スプレー缶は手作業にて一つずつスプレー部分の金具を外していましたが、現在、スプレー缶を同社が地元企業と開発した機械に入れると、自動的に穴開けをし、キャップ取りを行うことができるようになりました。今後はこの機械の販売をしていきたいとのことでした。



スプレー缶のキャップを手作業にて外す



同社製作のスプレー缶自動分解処理機

## ■誰もが輝ける居場所として

同社がなぜここまで徹底した選別作業等が可能であるのか、リサイクル事業者としての責務を果たすことができるのか、大きな理由の一つとして昭和60年から知的障がい者(ほとんどが知的障がい者)の採用を始め、現在全社員の約半数を占めるといふ、彼らの活躍が大きいからだと言えます。障がいのある者、ない者、互いに持つ優れた能力を共働することにより、何倍もの大きな成果を生み出すことができる、同社創業者は、そのことにいち早く気づき実践されたとのことでした。

現在、笠原社長をはじめ多くの社員が障害者職業生活相談員講習を受け、また一部社員は企業在籍型の職場適応援助者講習も受け、会社として日々の就業状態等個別にきめ細かな指導を行い、作業のみではなく悩みや困りごとが早期解消できるような体制づくりを実践しています。

行事は、父母懇談会、レクリエーション、クリスマス会等、表彰歴は、「障害者雇用優良事業所表彰」、「愛知県特別支援教育 振興大会感謝状」、「名古屋手をつなぐ育成会 創立五十周年記念感謝状」、「障害者雇用促進協会会長表彰 優秀勤労障害者」2名です。

障がいを持つ方が、十分な戦力として働いている姿を見ると、資源の循環再生を社会的に強く要望されている当業界の課題、人材不足と人材育成の解決の糸口を感じます。



パートナー社員の豊かな個性を専務取締役の中西氏伸ばすことができる環境、共に得られる成長が業界の目指すSDGsのゴールに続くのではないのでしょうか。(中西専務談)